陸軍少飛平和祈念の会、会報 No17 号

2020(令和 2)年 2 月

本会のＨＰ　http://sho-hi.sakura.ne.jp/をご覧下さい。
毎月第３土曜日ＡＭ10～12 時に定例会を行っています。ご参加ください。
会報をメール配信に切り替えています。
メールアドレスを、heiwakinen@sho-hi.jp までお知らせください。

（１） 新会員です。
（賛同会員）友寄隆静さん（沖縄県沖縄市）、原田萬喜子さん（神奈川県藤沢市）です。よろしくお願いします。
友人、知人に入会をお勧め下さるようお願いします。

（２） 寄付、新潟県の１７期齋藤さんの関係で匿名希望の Ｓ さんから５千円、賛同会員の岸さんから千円のご寄付を頂きました。ありがとうございました。

（３）来年度の真如苑の助成金はなし
本会の活動の中心的な資金となっていた、真如苑の「多摩地域市民活動助成金」ですが、本会は過去３年間に、２０万円、４０万円、５０万円と、継続して助成金を受けてきました。２０２０年度の募集要領では、３年間継続して助成を受けてきた団体は申請できないとされており、２０２０年度の助成金申請を断念せざるを得ません。ただし、一年お休みした後、来年度、２０２１年度には、再度申請をすることが出来ます。従って、２０２０年度は、今年度の予算の残りと、２０２０年度の会費、寄付金収入でやりくりすることになりますが、他の財源が得られるか検討していきます。

（４）元少飛、生存者の交流会
懸案となっていた「元少年飛行兵、生存者の交流会」ですが、埼玉少飛会の新年会で検討していただきましたが、最高齢者が９６歳で、体調等を考えると、とても靖国神社（偕行社）まで行くのは難しいのでないかというお話が主流となっていました。現在、１７期会の皆さんと調整中ですが、３月に靖国神社で顔合わせをするのは厳しい状況になっています。

（５）今後の方針
２０２０年度は、真如苑の助成なしの前提で考えなければならないので、今年度の助成金を有効利用し、将来の「証言集」の続編の作成に向けて、既に収録済みのビデオ証言の文字起こしを進めていきます。また、ビデオ証言の収録も継続して行っていきます。

（６）第１７期少年飛行兵杉本明さんのビデオ収録を、令和元年１１月１８日神奈川県逗子市の沼間コミュニティセンター会議室で、午後１時から５時まで実施しました。以下冒頭部分を要約します。

本会のビデオ収録では、元少年飛行兵の方々の「戦争の体験」だけでなく、「戦争でどんな影響を受けたか」当時の暮らし等すべてをお伺いしています。杉本さんは、まさに「家族ぐるみで戦争の影響を受けた一人」であったと言えます。

（熊本県生まれ）

昭和４年５月２５日、熊本県下益城郡小川町（現宇城市）で誕生。両親と男７人女１人の８人兄弟。６番目の５男だった。家は精米業を営んでいた。父親は明治１２年生まれ、日露戦争に従軍、アメリカに渡って元手を稼ぎ、子供２人を連れて帰国、精米業を始めた。精米業と言っても当時は小作制度で、肥料や農機具等を貸して、作物が出来てからお米で物納してもらっていた。父親が精米業に専念し、母親が貸し付けを記録した通い帳を付ける等、全体の采配を行っていた。割と裕福だったと思う。

昭和１１(1936) 年から１７(1942)年、尋常小学校に通った。小学校では毎日奉安殿に最敬礼し、朝礼で東方遥拝していた。６年生の１２月８日に真珠湾攻撃があった。熊本は陸軍第六師団がいて軍事色が強かった。父親も軍国主義者で国のために一生懸命尽くす思いが強かった。

小学校の卒業時に成績優等賞をもらったが、中学受験は吃音のため口頭試問で不合格になり国民学校高等科に行った。家が街から山への中間で農家の子供たちとよく山で遊んだ。当時は商人の家が中学校へ、農家が高等小学校へ行く状況だった。高等科１年の時に再度中学を受験したが失敗。陸軍の幼年学校や少年飛行兵学校を受験して、高等科２年の昭和１８(1943)年１０月に東京陸軍航空学校に入校した。担任の先生も喜んでくれ

て生徒を集めて送別会を開いてくれた。両親と一緒に上京した。神戸や名古屋にいる父の甥っ子や姪っ子の所にもついでに寄るということだった。

（立川から大分、水戸、加古川へ）

立川に入校し一週間いた。班長から「生きて帰れるなんて思っていないだろうな。帰りたい奴は今すぐ帰れ」と言われた。生きて帰れないなんて考えてもいなかった。生きて帰りたいと本音を言う訳にもいかず、名誉の負傷でもいいから生きて帰りたいと思った。戦死した英霊への敬意と個人として生きる執念は別と思っていたのかもしれない。

通信として大分少年飛行兵学校に配属された。６時の起床ラッパ、午前は学科、午後は軍事教練を受けた。訓練後も所有物の整理や洗濯、夕食、風呂、自習、１０時の消灯ラッパで寝込んでしまうという、時間に追われた生活だった。

軍事教練の有線通信訓練では、電話機やケーブルを背負って移動し、列車のレールや橋桁に敷設した。夏に別府の野外演習場まで４時間の歩行訓練をしたが、喉の渇きで失神寸前になった。

一年後の昭和１９年１０月、水戸航空通信学校に行き、機上通信中隊に配属された。午前はトンツー訓練。大変な量の訓練だった。真空管の原理は理解できなかった。午後は機上でトンツーの実地訓練。練習機に４人乗って地上との通信連絡、方位決定、爆弾投下を訓練した。昭和２０年に入ると空襲が激しくなり、機上訓練が出来なくなった。飛行場に塹壕を掘り、機関銃で待機したが、逆襲を受けるので敵のグラマン機に発射することはなかった。６月、空襲の真空地帯だった鳥取分隊に移動し、米機動部隊を探索する索敵訓練等を続けた。

８月１５日、今日は飛行機が飛ばないからと全員集合となった。玉音放送を聞いたがよく分からず、夕方上官から戦争に負けたと聞かされた。本隊があった兵庫県の加古川に集合し、本隊長から訓示があって復員となった。生きて家に帰れる、おふくろの所に帰れるのが、ただ嬉しいという思いだった。

（戦争と家族）

少年飛行兵を志願した当時、家は両親と姉と弟２人の６人家族だった。長男は北満、次男は中支、三男はカナダ、四男は海軍で佐世保に入隊していた。家では毎朝４人分の陰膳をしていた。長男は義姉と子供４人の６人家族だったが、現地召集を受けて捕虜になりシベリアに抑留された。義姉は子供たちと北満から奉天まで逃げたがチフスで病死してしまい、生き残っていた３人の子供たちは満人に預けられた。引揚者の方が義姉の胸に書かれていた住所を頼りに経緯を知らせてくれた。その後の引揚者の中に３

人を探したがいなかった。長男は昭和２３年に帰ってきたが、次男が跡取りになって精米業を継いでいたので、母親の従妹のソーメン屋に手伝いに行き、誰にも相談せずに姓を変えてその家の婿となった。

母親は父の後妻で、会ったこともない１２歳年上の父と結婚するため、一人でバンクーバーに行った。長男は日本で出産したが、次男と三男はバンクーバーで生まれた。次男は昭和１５年１２月、戦況がおかしくなって父親の病気を理由に日本に帰ってきた。三男はそのままバンクーバーに残ったが、戦争中は大変だったらしい。終戦後トロントで生活していることが分かった。四男は昭和１８年４月に海軍を志願、２０年頃フィリピンに派遣された。ジャングルの中を逃げまわっていたが、夜、外の村に電気で照らされた日本人らしき人を見て、終戦となったことを理解した。ジャングルから出て捕虜となった。２１年になってひょっこり幽霊のようになって帰ってきた。ジャングルでの白兵戦や傷口にわいたウジの話を聞いたが、ある時からピタッと戦争の話をしなくなった。長男も四男も、死んだと思われていて、ある日突然帰ってきたお父さんだった。

（熊本中学から早稲田大学）

復員後、熊本中学に復学し、バレーボール部を結成して一生懸命練習し県大会で優勝した。金沢の第２回国民体育大会に出場すると、入場式の主賓席に現人神だった天皇陛下を見て感激した。

早稲田大学の入学式で「戦時中は軍事教練が大変だった。東大、明治は早々と軍事教練を承諾したが、早稲田は拒否していた。軍事教練の必要性を説きに大佐が来て、壇上で『諸君』と言い出した時、『大佐、その胸の勲章は人を殺した功績の勲章ではないか。そんな軍事教練なんてやれるか』と学生が騒ぎ、大佐は話せなくなった。それが早稲田精神だ」と教授が挨拶しビックリした。

当時は食糧難でいつも空腹だった。食事つきの下宿に入るなら米を出せと言われ、実家から米をもらい差し出した。１年くらいは、日々の暮らしに追われて勉強する雰囲気には全くならなかった。大学の休みには真っ先に熊本に帰った。旧制で１年、新制で４年の計５年の大学生活を経過する頃、世の中もだんだん落ち着いてきた。

終戦後、父親は本当に苦労していたと思う。杉本家の経済事情からすれば、私が東京の大学に行くことなどもともと無理だった。大学に行く子供がいるということは、田舎では大変な名誉に思われていた。父は、次男と喧嘩しながら私に金を渡してくれた。私一人が大学に行かせてもらえたことを感謝している。